イラン・イラク戦争 毒ガス弾負傷 日本で治療の元兵士

感謝の来日 医師と再会へ

広島のNPO橋渡し

中谷寿男教授

イラン・イラク戦争末期の一九八八年に毒ガス弾で負傷し、日本での治療で一命を取り留めた元イラン人兵士アリ・ジャラリさん(42)が今月下旬に来日し、当時の担当医師と十七年ぶりの再会を果たす。橋渡しをしたのは国際医療支援活動を続ける広島市の特定非営利活動法人(NPO法人)「モーストの会」(澤谷静子理事長)。イランの毒ガス被害者支援団体との昨年来の交流がきっかけとなった。(広田恭祥)

担当した医師は、大阪府守口市の関西医科大救急医学科の中谷寿男教授(57)。勤務していた東京の帝京大医学部付属病院救急救命センターで、医師ら五人のチームリーダーとしてジャラリさんらイラン人兵士二人の治療をした。

部隊長だったジャラリさんは八八年三月、作戦を終えてイラン・イラクの北部国境付近にいた。そこへイラク軍機がマスタードガス弾を数発投下し、一発が近くで炸裂した。除染のシャワーを浴びたが容体は悪化。病院に運ばれ、意識を失った。目を覚ますと日本の病院だったという。

イラン政府は当時、毒ガスで重傷を負った兵士に欧州や日本で治療を受けさせ、国際世論に訴えていたとされる。資料では、ジャラリさんは四月上旬に成田赤十字病院(千葉県成田市)に収容され、同月中に帝京大に移された。

対訳カードで問診

中谷教授によると、ジャラリさんは全身が赤くただれ集中治療室へ。呼吸不全に陥り、人工呼吸器を装着。肺炎も併発した。最大の危機は五月二十日、気管内出血で心拍数が低下。深夜に遺言を受けた時は「もうダメだと思った」と振り返る。

言葉が通じない上、未経験の治療。ペルシャ語の対訳カードで問診し、文献に当たって懸命の処置で回復に向かい、七月中旬に帰国した。数年後に一度だけ、容体悪化の知らせがあった。

再会のきっかけは今年

六月、モーストの会メンバーがイランの毒ガス被害者支援団体との交流のため訪れた首都テヘランの病院でジャラリさんから聞いた証言。今も肺や目を思う体験談の中で「お世話になった日本の医師と看護師に、お礼を言いたい」との言葉がメンバーの胸を打った。

大久野島も訪れる

ジャラリさんは八月、同会の招きで再来日し、広島を訪れた。平和記念式典に参列し、旧日本軍が毒ガスを製造した大久野島(竹原市)へも渡った。お別れ会では「悪しい出来事を二度と起こさないよう、手を取り合おう」と目を潤ませた。

この二度目の来日時に持参した入院時の写真と病院の英文記録にあった医師のサインから、同会のメンバーが中谷教授を探し出した。ジャラリさんは今月二十四日から東京、広島などに約一週間滞在し、二十九日に大阪で中谷教授と再会する。

「元気でよかった」と中谷教授。国身は十年前の地下鉄サリン事件に東京都の嘱託医としてかかわった経験もあり、「毒ガスが今なお身近にある現実に複雑な思いだ」と語る。同会の澤谷理事長は「被害者の精神的ケアなど人道支援を続け、医療交流にもつなげたい」と力を込めている。

⑤集中治療室で看護師と写真に収まるジャラリさん(1988年、帝京大救急救命センター)⑥来日中の広島市での交流会で、笑顔を見せるジャラリさん(右端)=8月9日